

2004年に国際教養大学を秋田に設立した。「国際教養」は、グローバル化の時代に備えた新しい概念。最近の大学は国際教養ブームになっているが、そのさきがけとなった。
わが国の大学は1991年前後から教養教育が制度的になくなった。教養教育の重要な部分に外国語教育がある。だが、日本の外国語教育はどうか。外国語はコミュニケーションの道具なのに中学から大学までの10年間学んでも、ほとんど使えない。全く意味がないし、知的損失だ。
東京外国語大学の学長時代、英語教育の改革に取り組んだが、何も変わらなかった。抜本的改革をしないと、グローバル化に対応する教育は成り立たない。

国際教養大学理事長・学長

なかじま みねお
中嶋 嶺雄氏

基調講演



東京外国語大中国科卒。東京大社会学研究科博士課程修了。東京外国語大教授、1995年から2001年まで同学長。文部科学省中央教育審議会委員。専門は国際関係論、現代中国学。

国際化に対応の教育実践

まずは、外国語能力。国際教養大では、すべての授業を英語で行う。入学後の英語集

中プログラムで、3か月でC N Nニュースが理解でき、半年で英語で発表ができるようになる。

次は基礎教育。社会学や国際関係論などがある。例えば音楽は約10人のクラスで、パソコンから現代まで、演奏家が実際にバイオリンを弾き、

学生は少教精鋭で、1学年の定員は130人。1年生と留学生は全員が寮生活を送る。若い人は寮を嫌うと思っ

卒業時に全員が英語能力試験TOEFLで600点以上を目指す。こういう形で新しい大学作りをしている。

英語を見ながら学ぶ。本当の教養教育をしている。
そこから「グローバルビジネス課程」と「グローバルスタディズ課程」に分かれ、教養の枠内の専門教育が始まる。「大学全入時代」から、本当の専門はやはり、大学院だ。
優秀な教職員も重宝だ。経営形態は公立大学法人として出発した。教員は公募し、最終的には模擬授業もしてもらった。

め、判定も専門的にできる。また、暫定入学制度がある。せっかく入学を希望してくれているのに、わずかな差で不合格にするのはつらい。それを科目履修生として受け入れ、1年後に条件を満たせば、正規の学生に登録する。
私自身、国立大の学長のころは予備校や高校を回ることにはなかった。だが、今では県内の高校ばかりか、東京や大阪の塾の会合にも出ている。自ら広告塔となり、受験指導もしている。その結果、入試の難易度も高くなり、トップレベルになった。入学後は学生一人ひとりに対するケアが全く違い、付加価値がつく。

